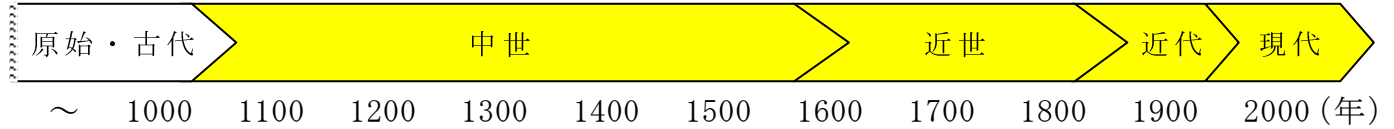


9 日本の伝統文化とひろしま うえだ そう こ ～上田宗箇～



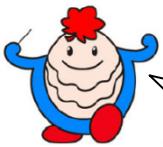
1 上田宗箇とはどのような人物でしょうか？

上田宗箇（1563～1650）は、安土桃山時代から江戸時代初期に活躍した**武将**であり、茶道上田宗箇流の創始者です。宗箇は、尾張国（現在の愛知県）に生まれ、織田信長の重臣丹羽長秀に仕えた後、豊臣秀吉に抜擢されて越前（現在の福井県）に1万石を与えられ大名になります。



上田宗箇着用の具足
(仏胴腰取丸胴具足 鉄黒漆塗風折烏帽子形兜付)

1619（元和5）年、当時仕えていた紀州（現在の和歌山県）の浅野長晟が広島に国替となると、宗箇も広島に入りました。やがて、上田家の家督を二代重政に譲ると、窯を築き茶碗を焼くなど茶の湯三昧の晩年を送りました。宗箇は、一番槍の猛将として多くの武功を挙げた武将でありながら、茶人、そして庭づくりの名手としても優れた才能を発揮しました。宗箇の残した茶の湯は、茶道上田宗箇流として、代々受けつがれ現代の広島に残されています。



上田宗箇はどのようにして茶道にかかわり、どのような特色をもった茶道を創始したのでしょうか？現在、どのように受け継がれているのでしょうか？

2 上田宗箇と茶道のかかわりはどのようなものだったのでしょか？

豊臣秀吉の家臣となった宗箇は千利休の茶を学びました。利休が亡くなった後は、利休の弟子であり、当時天下の茶人として知られた古田織部の弟子となります。茶の湯に深く傾倒した宗箇は、織部と共に武家の茶にふさわしい価値観を創造していきます。

関ヶ原の戦いでは豊臣方につき敗れたため、領地を没収されますが、阿波（現在の徳島県）の蜂須賀家に招かれ、徳島城表御殿千秋閣庭園の作庭を行い、茶道の指南役（指導者）も務めました。その後、親せき関係にあった紀州（現在の和歌山県）の浅野幸長に求められ

年	おもなできごと
1563	尾張国星崎に生まれる
1574	丹羽長秀に仕える
1585	豊臣秀吉に仕える
1590	千利休の百会記の茶会に参加する
1601	古田織部の茶会に参加する
1602	蜂須賀家政に招かれて阿波に渡る
1605	浅野幸長に招かれて紀州に移る
1615	大坂夏の陣
1619	浅野長晟に同行し広島に移る
1620	縮景園の作庭に着手する
1650	88歳で亡くなる

上田宗箇の年表

て家臣となり，和歌山城西之丸庭園を作っています。

1615（元和元）年の大坂夏の陣では，徳川方として出陣し，和泉国檜井（現在の大阪府泉佐野市）の合戦では，敵

の猛将を阻む功績を挙げ，徳川家康・秀忠から大いに賞賛されています。この戦いの最中，迫りくる敵を待ち受けながら，宗箇は平然として小刀を持って竹藪の竹を切り，茶杓を2本削りました。これが「敵がくれ」と呼ばれる茶杓です。宗箇が戦場にあって沈着不動の精神を持っている逸話として古くから知られた茶杓です。

広島へ移ってからは，小方（現在の大竹市）に1万7000石の領地を与えられ，浅野長晟に命じられて縮景園を完成させました。こうして庭づくりの名手としても知られるようになり，徳川家からも請われて名古屋城二の丸公園の作庭も担当しました。

宗箇は，利休の一切の無駄を排除した「わび」と織部の多様な「へうげ（ひょうげ）」の世界を融合させ，自らの茶道具の美意識を「ウツクシキ」という言葉で語っています。



竹茶杓「敵がくれ」
（上田流和風堂蔵）



宗箇作御庭焼茶碗「さても」
（上田流和風堂蔵）



縮景園の様子

3 茶道上田宗箇流はどのような特色があるのでしょうか？

上田宗箇流は現代まで残った武家茶道の流れを持つ独特な作法を伝えます。例えば，点前（抹茶をたてる順序・作法）は直線的で，外へ外へと向ける動き



男性正座横



女性座礼

が繰り返されます。また、点前の中の柄杓の構え方、扱い方、帛紗の扱い方が独特です。男性は柄杓で湯水をくむ動作に弓矢をつがえる動作が残っており、馬上での姿に似ています。茶巾（茶碗を拭くための布）のたたみ方は、男性はななめにさばくのにに対して、女性は縦三つ横四つにさばきます。帛紗は、左腰に刀を差していた名残から右腰につけています。

次の写真は、上田宗箇が住んでいた屋敷を復元した和風堂の様子です。このように当時の様子を伝える屋敷、茶室、庭園のほかにも、伝来の道具、古文書も数多く残されており、現代へ受け継がれています。



書院屋敷 廻り廊下



茶室「遠鐘」



和風堂 鎖之間

(※写真はすべて上田流和風堂提供)



上田宗箇は、どのような人物でどのように茶道にかかわり、どのような特色を持った茶道を創始したのか、調べたことや考えたことをもとに自分の言葉でまとめてみましょう！

【もっと調べてみよう！郷土の歴史】

- 広島県内に伝わる茶道や華道について調べてみよう！
 - ・上田和風堂の実際の建物はどのようになっているのでしょうか。
 - ・上田宗箇流以外にどのような流派があり、どのような特色があるのでしょうか。
- 雅楽や民謡、現代に伝わる和楽器などについて調べてみよう。
 - ・広島雅楽会や坂雅正会はどんな活動をしているのでしょうか。
 - ・民謡はいつ頃から謡われ、どのような特色があるのでしょうか。

◇上田流和風堂

住所：広島市西区古江東町 2-10 TEL：082-271-5307 HP

◇縮景園

住所：広島市中区上幟町 2-11 TEL：082-221-3620 HP

◇喜多流大島能楽堂

住所：福山市光南町 2-2-2 TEL：084-923-2633 HP

【もっと知りたい！郷土の歴史】

喜多流大島能楽堂（福山市）

能楽は、室町時代、將軍足利義満の支援を受け、観阿弥・世阿弥親子によって大成され、その後、600年以上上演し受け継がれてきた、日本を代表する伝統芸能です。桃山時代には、能の愛好家であった豊臣秀吉に守られ、能舞台、衣裳、能面などが現在使われている型とほぼ同じになったと言われています。

喜多流は、江戸時代になり、それまでにあった4つの流派（観世、金春、金剛、宝生）に加えて、新たに創設を許された流派です。流祖は喜多七太夫で、將軍徳川秀忠の後援により創設を認められました。

喜多流の特長は、型は簡素、雄大で力強く直線的、謡も質実剛健といわれています。明治維新後、福山では藩の能楽師を務めていた家が途絶えたため、藩士であった大島七太郎が師匠の跡を継ぎ、備後一円に能楽を普及させました。

七太郎の長男寿太郎は、1914（大正3）年に福山市の新馬場町（今の霞町）に能舞台を建て、1917（大正6）年には能楽「鞆浦」を創作し演能しました。その後、戦災で能舞台は焼け落ちますが、3代目久見がこれを再建し、後には能楽堂を建てて喜多流能楽教室（現在の定例鑑賞能）を立ち上げました。

現在は、4代目政允を中心に能楽の普及活動を行い、活動の場は、県内のみならず、全国あるいは海外へ広がり内外から高く評価されています。

また、喜多流大島能楽堂では、学校への出張授業や能の体験活動が行われ、県内の多くの学校が参加しています。



仕舞「羽衣」
（喜多流大島能楽堂提供）



能楽堂
（喜多流大島能楽堂提供）